

また何故か遠ざけていた大御所・司馬遼太郎の作品にも没入出来ました。特に心を動かされたのが、高田屋嘉兵衛の一生を描いた「菜の花の沖」や、村田蔵六（後年大村益次郎と改名）の戦いを描いた「花神」です。両名とも江戸末期や幕末の日本を生き、個人的には畏敬の念を感じる人物となりました。入念な下調べと長い年月をかけての著作は想像を絶しますが、当時の国内外の時代的

背景をもとに、歴史と其中で生きた人物を生き生きと浮かび上がらせてくれる様は圧巻です。偉そうな事を言うつもりはありませんが、目指すべき未来は、歴史にその指針が示されており、「坂の上の雲」も含め多くの作品がまさに「温故知新」を感じさせてくれます。

またこの先どんな本に出会い、どのような世界に誘ってくれるか楽しみです。

(かしわくら いくお)

図書館に関する話題 第11回

文学全集への誘い

教育学部講師 仁平 政人



平成二十四年度文系図書整備予算によって、弘前大学附属図書館に多くの文学者の全集が購入された。具体的には、田山花袋・泉鏡花・川端康成・三島由紀夫・遠藤周作・中上健次といった著名な小説家の新版の全集をはじめ、北原白秋・中原中也・西脇順三郎・田村隆一という近現代を代表する詩人達、近年注目を集めている昭和初期の女性作家・尾崎翠、日本における探偵小説の確立者たる江戸川乱歩の全集など。先に本館に収められていた全集・著作集とあわせて、時代・ジャンルともに幅広い文学者の活動に触れられるようになったと言えるだろう。

さて、図書館の利用者の中でも、文学者関係の全集を手にとったことはないという方は多いかもしれない。ここでは、文学全集が持つ面白さや魅力について、簡単な紹介を試みたい。

文学者の全集と一口に言っても、本人が刊行した著作類を中心としたものから、生前未発表の原稿や日記・書簡を収めたものまで、内容は多様である（中でも『決定版 三島由紀夫全集』は、講演・朗読・歌唱など肉声を収めたCDや、本人が制作・監督・主演を務めた映画『憂国』のDVDまで含み、「文学者の全集」というイメージを大きく超えるものとなっている）。ただいづれにせよ、作家の文章を網羅的に集め、その活動の軌跡を余すところなく示してくれるところに、全集の利点はある。

また、全集に収められた草稿や構想メモなどを見るならば、有名な小説がどのように生れたのかという創造のプロセスに触れることも可能だ。以上のような点で、ある作家の世界に深く触れたい読者や、文学に関わる研究を行いたい学生にとっては、全集は豊かな楽しみや知見をもたらしてくれるだろう。



講演・朗読・歌唱など肉声を収めたCD



本人が制作・監督・主演を務めた映画「憂国」のDVD

